夏目漱石内坪井旧居

日本を代表する小説家の一人である夏目漱石（1867-1916）は、第五高等中学校（今日の大学に相当）の英語教師になるため、1896 年 4 月に熊本に来ました。彼は 1900 年まで熊本に住んだ後、英語を学ぶために文部省によってロンドンに派遣されました。

この住居は、漱石が熊本時代に住んでいた 6 つの家のうち、5 番目の家です。内坪井旧居は、2 つの理由から重要な意味を持っています。第一に、熊本で住んだ家の中で唯一、程度の差はあれ、元の場所で変化なく現存している点です。他にも 2 つの家が残っていますが、それらは大きく手が加えられています。第二に、漱石の長男である筆子が 1899 年にここで生まれた点です。この家には 8 つの部屋と、生後間もない筆子を洗うための水を供給していたと思われる井戸のある、心地よい庭があります。家賃は月 10 円で、現在のおよそ 10 万円に相当します。

この地に住んでいた頃の漱石は 30 代前半で、まだ小説を書いたことはなく、英語教師として働く傍ら、俳句を詠んでいるに過ぎませんでした。生涯で 2000 句前後を詠みましたが、そのうち 900 句は熊本に住んでいたときのものです。同級生の友達であり、後に有名な俳人になった正岡子規（1867-1902）の影響を受けたことは間違いありません。

熊本では小説をまだ書かいていなかった漱石ですが、将来に備えて資料を蓄えていたことは間違いありません。1906 年の小説『草枕』と『二百十日』はいずれも熊本を舞台にしています。